銭形平次捕物控

怪傳白い鼠

野村胡堂

青空文庫

一

「親分は、本當に眞面目に聞いて下さるでせうか、笑つちや嫌で御座いますよ」

「藪から棒に、そんな事を言つても判りやしません。もう少し順序を立てて話して見て下さい。不思議な話や、變つた話を聞くのが、言はゞ私の商賣みたいなものだから、笑ひも何うもしやしません」

錢形の平次は、凡そ古文眞實な顏をして、若い二人の女性に相對しました。捕物の名人と言はれてゐる癖に、滅多に人を縛らないから、一名縮尻平次ともいふ、讀者諸君にはお馴染の人物です。

二人の女といふのは本町三丁目の糸屋の娘お雛と、その女中のお染、お雛はまだ十七ですが本町小町といはれた美しさ。本當に透き通るやうな江戸前の娘で、お染は平次の女房お靜のお針友達で、この時は二十一二、少し緣遠い顏立ですが、その代り口の方は三人分も働きます。

根岸の寮に居るお雛主從が、何か思案に餘ることがあつて、錢形の平次の宅を訪ねたのは、若菜時のよく晴れた日で、久し振りのお靜に逢つても、ろくに話もせずに、いきなり平次に引合せて貰つて、こんな調子に切り出したのでした。

「ね、親分。親分はお化とか幽靈とかいふものが此世にあると思ひますか」

とお染。お盆のやうな顏を緊張さして、果し眼で詰め寄るのを見ると、義理にも幽靈がないなどとは言はれさうもありません。

「あるとも言ひ、ないとも言ふが、私は見たことがないから何とも言へませんよ」

藍微塵の袷を、膝が破れさうに坐つて、此時代では何よりの贅澤とされた銀の吸口のチヨツピリ付いた煙管で煙草盆を引寄せる平次は、若くて好い男ながら、何となく捕物の名人らしい貫祿が備はつて居ります。

「そのお化が出るんですよ、親分」

「何處へ？」

「お嬢樣と坊ちやまがいらつしやる、根岸の寮に」

「へエ——少し詳しく話して見なさるがいゝ。岩見重太郎のやうに、乘込んで退治といふわけには行かないが、事と次第によつちや、お化けを縛るのも洒落て居るだらう」

「親分、冗談や、拵へ事ぢや御座いません。これは、現に、私もお嬢樣も見た話で、その爲に坊ちやまは、熱を出したり、引付けたりする騷ぎですよ」

お染は自分の雄辯を試みる機會を狙つて居たやうに、勢ひ込んで話し始めました。

本町三丁目の糸物問屋、近江屋といふのはその頃の萬兩分限の一人ですが、二三年前に主人が亡くなり、續いて一年ばかり前に、母親が死んで、今は、主人の弟、友二郎が支配人として、店の方一切を取仕切り、娘のお雛と、その弟で四つになつたばかりの富太郎に、女中のお染と下男の六兵衞を附けて、根岸の寮に置き、專ら身體の弱い富太郎の養生をさせて居りました。

友二郎は四十年配、先代の實弟で、まことによく出來た人間ですが、何分店の方が忙しいので、滅多に寮を見舞つて居る暇もありません。それでも、三日に一度、七日に一度づつは、泊りがけにやつ

て來て、姪のお雛の美しく生ひ立つのと病弱な富太郎が、少しづつでも丈夫になるのを見て歸りました。

お雛には先代が取決めた重三といふ許婚があります。これは遠縁の者で、奉公人同樣店で働いて居りますが、お雛より八つ年上の二十五で、もう愚圖々々しては居られないのですが、何分お雛がまだ若いのと、母親が死んで一年も經たないので、祝言の盃をするわけにも行きません。併し、根岸の寮は無人なので、叔父の友二郎に差支へのある時はなるべく行つて泊まることにして居ります。

女のやうに物優しい働き者で、お雛の叔父の友二郎にも信用があり、ことにお雛の弟の富太郎は、重三でなければ夜も日も明けないやうな騷ぎをしますが、何分店の方が忙しいので。毎晩根岸まで行つてやるわけにも行きません。

お雛は娘らしい恥かしさのせゐか、重三とはろくに口もきゝませんが、いづれ母の忌が明けさへすれば、改めて祝言をさした上、別に小さい世帶でも持たせることになつて居りますから、嫌ひといふ程ではなく、從つて默つてその運命を待つて居る強でせう。

かうして日は無事に過ぎましたが、何時の頃からか、總領の富太郎は蟲の氣がひどくなつて、夜分にひどくうなされたり、物驚きをしたり、時々は引付けたり、次第に糸の如く痩せ細つて、頼りない有樣になつて行くのでした。

「坊ちやまにお訊きすると、夜中にお化が出る、とかう仰しやるんですよ。染や、何とかしておくれ、重三、重三――と、時々はむづかりなさいますが、どんなお化が出るのやら、一向見當が付きません」

お染はかう言ひながらも、幼い富太郎が、目に見えぬあやかしに惱まされて、夜と共に怯えて泣き騷ぐ怖ろしさを思ひ出したものか、肥つちよの肩を縮めて、ゾツと身を顫はせました。

「その坊ちやんは、誰と一緒に寢て居なさるのかい」

と平次。

「いえ、疳の強いお子さんで、そんなに物驚きをなさりながらも、どうしても誰とも一緒にお休みになりません。仕方が御座いませんので、お嬢樣か私が、床を並べて、お佛壇の前に休んで居ります」

「お佛壇の前？」

「え、それにもわけが御座います。去年御新造樣がお亡くなりになる時、大事なものは私の魂と一緒に佛壇の中に入れてあるから、お嬢樣かお坊ちやまは必ず此處で休むやうと仰しやつたので御座います」

「フーム、大分話が面白さうだな。ところで、その坊ちやんが怯えるのは毎晩の事かい」

「いえ、時々で御座います」

「番頭の友二郎さんの泊つて居る時とか、手代の重三さんの泊つて居る時とか、決つては居ないのか」

「それが不思議で御座いますよ、親分。重三さんの泊つた時は何ともなくて、番頭さんの泊つた時に限つて、お坊ちやまは怯えなさるんです」

「――」

二

「お坊ちやまの痩せ細るのを見て居ると、お氣の毒でお氣の毒で、

とても我慢が出來ません。お嬢樣もひどく御心配なすつて、さう言つては惡いが、明神樣をだしに使つて、お願ひに上がつたやうなわけで御座います。親分、何とか工夫をしてやつて下さいませんでせうか」

達辯にまくし立てるお染の蔭から、高貴な感じのするほど美しいお雛が、八丈の袂を爪繰るやうに、おど〳〵した顏で平次を見守ります。

「それは驚いたな、お染さん。併し、たつたそれだけの話なら岡つ引へ來るより、醫者を賴むのが順當ぢやあるまいかネ。私にお化を縛らせるより、蟲下しを二三服呑ませた方が手つ取早く利きはしないかい」

平次はさして驚く樣子もありません。

「いえ、親分。それだけなら、わざ〳〵此處までは參りません。四つになつたばかりのお坊ちやまのむづかるのは、當り前と言へばそれまでで御座いますが、捨て置き難いのは、お嬢樣にも何か變なことばかり付き纏ひます」

「と言ふと――」

「家の中に、お嬢樣の命を狙ふ者があるので御座います。一度はお嬢樣の御飯の中に、石見銀山の鼠取りが入つてゐたのを、重三さんが見付けて大騷ぎをしたことが御座います」

「重三――といふと、お嬢さんの許婚の？」

「えゝ」

お雛はすつかり赧くなつて、お染の蔭に隱れて了ひました。

「どうして鼠取りが御飯の中へ入つて居ると判つたんだらう」

「それは判りませんが――何でも其前の晩は珍らしく番頭さんも重三さんも寮へ泊つて、朝はお二人にお嬢樣と坊ちやまと四人で御飯を召上つてお在で御座いました。重三さんがいきなり、お嬢樣の御飯が、變な色だから、と急に止めなさるんです」

「フーム」

「試しに猫にやつて見ると、猫は直ぐ死んで了ひました。御飯の中には、石見銀山の鼠取りが、うんと入つて居たんです」

「御飯は誰が炊くんだ」

「まア、親分。まさか私がそんな事をするとは思つていらつしやらないでせうね」

肥つちよの癖にお染は女だけに、矢張り妙に氣が廻りますが、

「お前さんなら、石見銀山の鼠取りなどを入れるより、お嬢さんを捻り殺す方だらう、私はそんな事を疑つてはゐない、安心しなさるがいゝ」

さう言はれると、からかはれ乍らも、人の好ささうなお染は釋然として了ひます。

「その他、お嬢樣だけ外に居る時、物置の材木が倒れて來たり、少し薄暗くなつてから歩くと、變な男がつけて來たり、そりや怖いことがあるんです。親分、私のやうな物の判らない女が考へても、お嬢樣とお坊ちやまを何うかしようといふ恐しい人間が蔭で糸を引いてるやうな氣がしてなりません。御苦勞でも、ちよいと、根岸までお出かけ下すつて、せめてお化の出ないやうな工夫だけでもしてやつて下さいまし。さうでもして頂かないと。何んな事になるかわかりません」

お染の熱心な調子は、到頭平次を動かして了ひました。

「よし、一と肌脫いでみよう。ところで、今晩は外によんどころな

い用事があるから、明日出かけるとして――」

「親分、今晩は番頭さんが寮へ來なさる晩で、又どんな事があるか心配でなりません。出來ることなら、私共と一緒にいらしつて、寮へ一と晩泊つて見ては下さいませんか。お靜さんへは、私がよくお願ひしますから」

お染はなか〳〵引きさうもありません。

「さうも行かない――かうしよう。家にゴロゴロして居る八五郎、大して賢い人間ぢやないが、その代り毒のない、話の面白い男だ。それを連れて行つて、今晩一と晩用心棒にするがいゝ。智惠は大したことはないが、力だけは人の二人分もある」

「――」

お染は何か腑に落ちない顏をして居りますが、さすがにこの上は爭ふこともなりません。

「ガラツ八、其處に居るのか」

「ヘエ――」

「お孃さんとお染さんについて、根岸まで行つてくれ。今晩は向うへ泊るんだ」

「ヘエ――、あまり智惠のねえ人間でも役に立ちますかい」

「馬鹿ツ、立ち聞きして居たのか」

と平次。

「さういふ譯ぢやねえが、何しろお屋敷が廣いから、あんな大きな聲で話しや、何處の隅つこに居たつて聞えますよ。岡ツ引はよく人の話に氣を付けて聞くがいゝつて、日頃親分も言ひなさるし――」

「呆れた野郎だ」

「尤も、あつしの惡口が始まりさうになつた時は、聞いちや惡からうと思つて耳の穴へ指を突つ込んで見たんだが、こいつは長く續きませんや、氣色が惡くて――」

「馬鹿だな、お前は。まア何でもいゝやな、お孃さん方と一緒に出かけるんだ」

「ヘエ――」

「ね、親分。八五郎さんとかを一緒に行つて貰つては、お化にも惡人にも用心させるから、今晩そつと來て、寮へ入り込んで頂けないでせうか」

とお染。

「成程、それも面白からう。さう言つちや何だが、お染さんは思ひの外軍師だね」

「あれ親分、冷かしちやいけません」

三

その晩、ガラツ八の八五郎が、根岸の百姓町にかゝつたのは亥刻（十時）を少し廻つた頃、御行の松の手前を右へ折れて、とある寮の裏口へ、忍ぶ風情に身を寄せました。

平次に冷かされつけて居る狹い袷、彌造を念入りに二つ拵へて、左右の袖口が、胸のあたりで入山形になるといつた恰好は、『色男には誰がなる』と、言ひたいやうですが、四方が妙に淋しくて、住む人も少いせゐか、ろくな犬も吠えてはくれません。

八五郎は、裏口へ寄り沿つたまゝ、彌造の中から取つて置きの拳固を出して、そうツと撫でるやうに、二つ三つ雨戸へ觸つて見ました。それを待つて居たやうに、そつと中から開けたのは、寢卷姿の

お染、まだ寢亂れては居ませんが、醜いながらも妙に娘らしくなまめきます。

「八五郎さんかい？」

「うむ、用意は？」

引入れて雨戸を締めると、中は眞つ暗。手と手を握つた二人は、遠い廊下の有明を目當に、逢曳らしい心持で、奥へ辿りました。

「まだかい、お染さん」

「シツ、二階には番頭さんが泊つて居る、靜かにしておくれ。お前さんなんかを引入れた事が知れると大變なことになるよ」

「人間はそれつ切りか」

「裏の方には、爺やの六兵衞が寢てますが、これは離れて居るし、寢酒がきいて居るから、眼なんか覺めはしない」

「重三とかいつた手代は？」

「今晩は本町の店に泊つて居るし、店卸しで忙しいとさ」

これだけ話して居るうちに、廊下は盡きて、先代が信心と物好で、奥の一と間へしつらへた、大佛壇のある部屋の前に着いて居りました。

「お孃樣」

「お染かい」

中から、これも待つて居たやうに、薄明りの廊下の中に滑り出たのは、美しいとも何とも、言ひやうのないお雛の寢卷姿。疋田鹿の子の長襦袢に、麻の葉の扱帶を締めて、大きい島田を、少し重く傾げた、※たけた姿は、ガラツ八が見馴れた種類の女ではありません。それはあまりに美しく、惱ましい姿だつたのです。

「八五郎さん、お坊ちやまが眼をお覺しになると惡いから、ソツと入つて樣子を見て居て下さいよ。今晩は番頭さんが泊つて居るから、きつと又、何か始まるに相違ない――」

「――」

ガラツ八は默つて部屋の中へ入りました。六疊ばかりの佛間、正面に見事な大佛壇、これは掛金がかゝつて、締つて居ります。その前に敷いた床が二つ。一つには、四つになる富太郎がスヤスヤと眠り、一つは今お雛が脫け出したまゝ、少しなまめかしく、紅い裏のかい卷をはね返して居ります。

枕許には、水差しと湯呑、それに、有明の行燈が一つ、一本燈芯で、薄明く灯いてゐるといつた寸法でした。

「寒くなるか、睡くなつたら、その床へ入つて休んで下さいな。お孃樣がいゝつて仰しやるから」

言ひ捨てゝ、お染は、お雛を促すやうに、廊下を遠のきます。

「――」

八五郎は暫く默つて、行燈の前に坐りました。富太郎はスヤスヤと眠つて居りますが、如何にも弱さうな少し發育の遲い子らしく、熱つぽい唇も、削げた頰も何となく賴り少なく見えます。

側に敷き放したお雛の床の、紅い掻卷の裏が、妙に惱ましく眼について、八五郎も暫くはモジモジして居りましたが、半刻ばかり後には、恐ろしい睡氣と、初夏の薄寒さにこらへ兼ねて、お染に言はれた通り、お雛の敷き捨てた床の中へもぐり込んで居りました。

中には、まだほんのり娘のほとぼりが殘つて、若い女だけが持つ、不思議な分泌物の香ひが、八五郎をくら〳〵させます。懷紙を掛けた、赤い箱枕、八五郎には馴れない代物ですが、娘の髮の匂ひか泌みて、獨り者の八五郎には、これも妙に惱ましい代物です。

暫く經ちました。何時ともなくウトウトして居たらしい八五郎は、コトリといふ音に眼を覺したのです。何とも言へない不氣味さが、部屋の中一パイに漲ぎつて、頭の上へ何やらノシかゝつて來るやうな心持がします。

ひよいと見ると、何時、何うして開いたか、先刻まで嚴重に掛金をおろして居た佛壇の戸が、八文字に開いて、行燈の灯を映した、金色の物具の中に、何やら、不氣味な青い物——。

八五郎はゾツとして枕を欹てました。紛れもありません、佛壇の中、位牌の前に現はれたのは、青黒い地に紅隈を取つて、金色の眼を光らせた、鬼女の顔なのです。

「怖い、怖いよう」

不意に賑を覺した富太郎は絶え入るやうに泣き叫んで、側に寢て居る筈の姉の懷へ飛込まうとしましたが、それが、思ひもよらぬ大男——しかも、あまり人相のよくない八五郎と見ると、二度目の驚きに、

「あツ」

そのまゝ引付けて了つたのです。

「しまつた」

八五郎は飛起せて子供を抱き上げましたが、眼を白黒にして、手足をヒクヒクさせるだけで、どうにもなりません。

八五郎は、子供を元の床の上に置いて、夢中で廊下へ飛出しました。

「大變、お染さん、坊ちやんが引付けた」

案内知つたお染の部屋の外から、もう、加減もなく聲を張り上げるのでした。

四

お雛とお染が、八五郎と一と塊りになつて驅け付けたのは、それからほんの三分、——昔の人の言ひやうを假りて言へば、物の百も數へる間がありませんでした。

開いたまゝの障子から飛込むと。行燈も床もその儘になつて居りますが、ツイ今しがたまで、ヒクヒクしながらも生きて居た筈の、富太郎の姿が見えないのです。

床は二つとも空つぽ、その邊には、人間を隱すやうな場所もありません。

「富ちやん」

「坊ちやま」

お雛とお染は、血眼になつてその邊を探し廻りました。

「あツ」

佛壇の中を覗いて居たお染は、蛇にでも噛み付かれたやうな悲鳴をあげて、飛退きます。

「何だ〳〵」

見ると、八五郎も先刻驚かされた鬼女の顔——、行燈を提げて近々と見ると、それは、佛壇の中にはあるまじき、恐ろしい鬼女の面に、髭の毛まで冠せて、位牌の前に据ゑてあつたのです。

「何うしたんだ、大變な騒ぎぢやないか」

その時漸く下の騒ぎを聞付けたらしい、番頭の友二郎は、少し寢亂れた恰好で、二階から降りて來ました。佛間のすぐ横は梯子段で、その上は友二郎の寢室になつて居たのでした。

「お坊ちやまが見えません」
「何？」
「あつと言ふ間に見えなくなつたんです」
お雛とお染の説明を聞きながらも、友二郎の眼は、其處に立つて居る男——曾て見馴れない八五郎の上を離れようともしません。
「この方は何處の人なんだ」
「これは、あの、八五郎さんといつて、神田の錢形の親分のところにいらつしやるんです」
「さうか、何うして此處に居なさるんだ」
「あの、近頃怖いことばかり續くんで、私がお頼みして參りました。ツイ先刻いらしつたばかりです」
お染のシドロモドロな辯解を、友二郎は世にも苦り切つた顏で聞いて居りましたが、御用聞、手先と聞くと、さすがに商人らしい弱さで、強いことも言へません。
「兎に角、手分けをして富太郎を探すんだ、家の外へ出るわけはないんだから。それから六兵衞は何うした？」
「呼んでも來ません。寢しなに番頭さんの御馳走で一杯やつたんですから、こんな事では眼を覺さないかも知れません」
お染は飛んで行つて、家の反對側、お勝手の隣の下男部屋から、爺やの六兵衞を叩き起して來ました。どんなに眠かつたか、素肌の上に半纏一枚羽織つて、胸毛と一緒に、掛守りと、犢鼻褌が、だらしもなくはみ出します。
年はもう六十恰好、お酒を頂くと、疳性で、素裸でなければ眠られないといふ厄介な親爺、これも遠緣の飼ひ殺しで、こんな時役に立つやうな人間ではありません。
それから手分けをして、家の中をすつかり探しましたが、富太郎は影も形もありません。曉方近くなると、出入りの鳶の者や、近所の百姓衆も來てくれましたが、床坂を剥ぐやうに探しても富太郎が見えないのですから、これは神隱しに逢つたとでも思ふより外には考へやうもなかつたのです。
一同がつかりして、元の部屋——佛壇の扉も、二つの床もそのまゝにしてある佛間へ引返しました。
「あツ、お坊ちやまが——」
お染が一番先に、元の床の中に、樂々と寢かされて居る富太郎に氣が付いたのです。
「どれ〳〵」
雪崩込んだ五六人、誰ともなく富太郎を抱き上げましたが、
「あツ、死んでゐる」
驚いて床の上へ落して了ひました。可哀さうに富太郎は、この時もう冷たくなつて居たのです。

五

「右の通りだ、親分。こいつはあつしの手にをへねえ、根岸まで行つて見ておくんなさい」
雨戸を開けると、翌る日の朝日と一緒に飛込んで來たガラツ八、飯を食ふ暇もなく一夜の恐ろしい冒險を報告しました。
「成程、そいつは念入りだ。ガラツ八兄さんぢや目鼻が明くめえ、飯でも濟ませて、一緒に行つてみるか」
「そんな暢氣なことを言つて、親分」

「まア、いゝやな、逃げも隱れもする下手人ぢやあるめえ。それに、一番怪しい鬼の面は、ちやんと取つて置いてあらうし」

「それがいけねえ。親分、子供が死んでゐるのに氣が付いた時見ると、佛壇にも部屋の中にも面はねえ――」

「さうだらう、それも筋書通りだ。さう來なくちや話が面白くならねえ」

と平次。

「いやに解つたやうな事を言ひなさるが、親分。その面の行方が、此處から見通しだとでも言ふんですかい」

「まあ、そんなところだ」

「それぢや出かけませう」

「待ちなよ、飯を食はなきア、戰が出來ねえ――。それから二つ並べて敷いてあつた床は、その儘にしてあるだらうな」

「いゝえ、大勢入つて來て、邪魔つけだから、娘の方の床は上げて了ひましたよ」

「あ、惜しいことをした」

「何か、あの床の中に證據になる物でもあつたんですかい」

「うんにや、手前が好い心持になつてもぐり込んだといふ、紅裏の娘の掻巻と、その床が見て置きたかつたんだよ、後學の爲に」

「チエツ、いゝ加減にして下さいよ」

「さア、出かけよう」

冗談を言ひながら仕度をした平次。ガラツ八を案内に、風薫る根岸へやつて行きました。

寮へ着いたのは、彼れこれ巳刻（十時）、まだ何も彼もその儘ですが、物好き半分、近所の衆や店から驅け付けた人達で、家の中は押し返しもならぬ有樣です。

「ガラツ八、これぢや、お化の方で驚いて逃げ出すだらう。用事のないものは、外へ出て貰はうぢやないか」

「合點」

ガラツ八は勢ひ込んで飛上がると、

「さア、錢形の親分がやつて來た。下手人の疑ひを掛けられたくない者は、皆んな外へ出て貰はうか。その邊にマゴマゴして居ると、縛られるかも知れないよ」

精一杯に張り上げると、驚いた有象無象、雪崩落ちるやうに外へ飛出して了つて、後に殘つたのは、お雛、お染、友二郎、六兵衞、それに本店から驅け付けた手代のうち、一番緣故の深い、お雛の許嫁の重三だけになりました。

「なるほど、疑はれてもいゝといふ人達ばかりだ。親分、何から手を付けませう」

平次は默禮したまゝ、家の中へ入ると、何より先づ佛間へ入つて、まだ小さい、床の上に寢かして、枕許に樒と線香だけ立てたまゝの、富太郎の死體を見せて貰ひました。

八五郎が言つた通り、四つにしては小さい方で、發育も智惠も遲れてゐるやうですが、姉のお雛に似て、玉子を剥いたやうな可愛らしさ。それが、顏一面に苦痛の色を浮べ、眼も口も大きく開いたまゝ、冷たくなつてゐる痛々しさに、物馴れた平次も思はず顏を反けました。

身體には針で突いたほどの傷もなく、黒血一つ溜つては居りませんし、喉も滑らかに白大理石のやうに無傷で、絞め殺した跡などは夢にもありません。全身の美しい色澤、口を開いて、舌を少し出し

て居る様子、苦悩の色こそありますが、毒殺でないことは、素人の平次にもはつきり判ります。

何うして死んだか——又は殺されたか、これでは全く解りません。耳の穴や肛門までも丁寧に檢査して見ましたが、どうしても、病氣で死んだか、引付けたまゝ死んだとしか思はれない様子に、平次もさすがに腕を拱くばかりです。

死體解剖などのない時代に、これ以上誰が見てもわかるわけはありません。平次は一たん裸にした子供に、元の通り着物を着せると、グルリと家の外を一と廻りして見ました。外から曲者の入つた様子はもとより殘つては居りません。

それから、家族の一人々々に逢ひました。お雛とお染は顔馴染、別に聞くこともありません。番頭の友二郎は、確り者の四十男で、金儲けや商賣には拔け目のないやうな人柄ですが、昨夜は少しばかり晩酌をやつて、亥刻（十時）そこ〳〵に二階へ上がつた切り、便所へも起きなかつたといふのは疑ふ餘地もありません。

爺やの六兵衞は、近江屋の遠縁の者で、年を取つてから轉げ込みましたが、先代や友二郎が同情して一生飼ひ殺しの寮番にして置く位ですから、別に害意のある様子も見えません。若い時には隨分いろ〳〵の事もやつたやうですが、それだけ人間が揉めて、如才なくて、器用で、お雛や重三には好い相手だつたのです。若主人の坊ちやんが死んで、これはオロオロするばかり。

「支配人さんの晩酌を別けて頂いて何にも知らずに眠つて了ひました。知つてさへ居りや、こんなことをさせはしません」

年寄らしく無駄なところで齒ぎしりをして居ります。

お雛の許婚の重三は、十年越し店に勤めた忠義者で、女のやうに優しい感じのする、物柔かな好い男、近江屋にはこれも遠縁に當るさうですが、それよりは、眞面目な勤め振りと、人柄を見込まれて、先代がお雛の許婚に定めた位の若者です。

「何とも申上げやうがありません。昨夜は棚卸しで、店の方がやけに忙しかつたので、氣になりながら四五日此方は見廻り兼ねて居りました。今朝暗いうちに使が來て、本當に驚いて了ひました。坊ちやんは、一番よく私になついて居りましたが、何といふ奴の仕業で御座いませう——」

氣の弱さうな重三は、もう涙含んでさへ居りました。

平次はこれだけ調べると元の佛間へ歸りました。もう一度、念入りに富太郎の死體を見ると、何處にも傷はないと思つたのは間違ひで、右手も、左手も、生爪が少し剥けて、爪際から血がにじんで居るのです。併し、それだけのことです。引付け際に苦しがつてその邊を掻きむしつたとしたら、これ位のことはある可き筈です。

六

「親分、あの鬼の面は何處へ行つたでせう」

ガラツ八はたうとう切り出しました。

「フーム」

「あの面を隱して居る奴が下手人に決つたやうなものぢや御座いませんか」

「それは何とも言へないな。だが、ガラツ八」

「ヘエ——」

「面だけなら、直ぐ見付かるよ」

「だから、何處にあるんで」
「二階の押入か、天井裏か、包の中を探してみな。其處になかつたら、俺は十手捕繩をお上へ返すよ」
「ヘエー、本當ですか。親分」
ガラツ八は段々を二つづつ飛上がつて二階へ行きましたが、間もなく、凱歌をあげて、逆落しに降りて來ました。
「あつた〳〵、ありましたよ、親分」
さう言ふ右の手には、髷を冠せた、凄まじい鬼女の面が、青い地、赤い隈に、金色の眼を光らせて居ります。
「さうだらう、それは定石だ」
「これだけ判りや、下手人は何奴です。親分、早く繩を打つて引立てませう」
「騷ぐな、八。その面は何處にあつたんだ」
「二階の部屋の隅にある風呂敷包の中ですよ」
「あツ」
それを聞くと、側に居た番頭の顏は眞つ蒼になつて了ひました。
「お聞きの通りだ。風呂敷といふのは、お前さんの持物でせう」
と平次。然り氣ない調子と言ふよりは、已むを得ないと言つた口調で顏へ上がる友二郎を顧みます。
「さうですよ、親分。どうして、そんなところにあつたんでせう。私には判らない」
「いや、私にはよく判る。氣の毒だが番頭さん、子分の者に送らせるから、暫く八丁堀の笹野樣の役宅へでも行つて居て下さい」
「私は何にも知りやしません。親分、それや何かの間違ひでせう」
「いや、面が二階の包にあるやうぢや、それより外に私にはさばきやうがありません。八、誰か來てゐるだらうな」
「え、二三人來てゐますよ」
「友二郎さんを送るんだ——。お前だけ此處に殘つてくれ」
「ヘエ——」
「親分、番頭さんはそんな事をなさる方ぢや御座いません。これには何か間違ひがありませう、どうぞ——」
心配さうな顏を出す重三を振りもぎるやうに、
「どうも仕方がありません。默つて見てゐて下さい」
平次は劍もほろゝにそつぽを向きます。

七

何時の間にやら日は暮れました。
富太郎の死體の始末をして、お通夜が始まる騷ぎですが、錢形の平次と、その子分の八五郎は、まだ歸らうとしません。
「お嬢樣の身の上に、何か危いことでも?——」
お染が心配して訊くと、
「大丈夫だ。そんなことはあるまいが、俺はどうしてあの子供を殺したか、それが知りたいんだ。岡つ引き冥利だ、心配することはないから、放つて置いてくれ」
平次は事もなげに言つて、相變らず、佛間から、二階、階段、納戸などを、根氣よく調べ廻つて居ります。
「この白鼠を飼つて居るのは誰だい、お染さん」
暗い納戸の中に、かなり大きな籠の中に入つて、精巧な車を廻して居る五匹の白鼠を見付けると、平次の好奇心は火の如く燃えます。

「爺やですよ」
「ちよいと呼んでくれないか」
「ヘエ――」
お染と入れ違ひのやうに、爺やの六兵衛はもみ手をしながら入つて來ました。
「この鼠を飼つてゐるのは、お前さんだつてネ」
「ヘエ――」
「結構な道樂だネ、お前さん生物は好きかい」
平次の調子はさり氣ないので、六兵衛もツイ滑らかに舌が動きます。
「ヘエ――、そんなわけでも御座いませんが、白鼠と、小鳥を少し飼つて居ります。馴れると、これが飛んだ可愛らしいもので、ヘツ〳〵」
「さうだらう、こんな生物を可愛がる人は、矢張り佛性なんだよ。ところで、八、お前は此處で見張つて居てくれ、俺はちよつと隣の部屋へ行つて來るから」
平次は納戸の外へ出ましたが、ほんの暫くすると歸つて來て、天井の壁際に少し出て居る、細い糸を引つ張ると、それを白鼠の籠の外へ出て居る、車の心棒に固く結びました。
「親分、何をなさるんで」
「まアいゝやな、外へ出て見よう」
平次はガラツ八と六兵衛を促して、佛間へ取つて返しました。平次の樣子の只ならぬに不安を感じたか、六兵衛はしきりにソハソハして居りますが、側にガラツ八が引添つて動かしません。
「佛壇は昨夜もこの通り締つて居たんだね、八」
「ヘエ――」
「昨夜の樣子と、今の樣子と、少しも變りはないか」
「ありません。昨夜の通りですよ、扉は締つて居るし、掛金はかゝつて居るし――あツ」
八五郎が驚いたのも無理はありません。嚴重に掛けられた筈の掛金が、誰も手を加へないのに、獨りで上へ吊上げられて、カチヤリと外れると、佛壇の扉は、中から押されるやうに、サツと八文字に開いたのです。
「どうだ、八。この通りだつたらう」
「え、どうしてこんな事が、親分」
「後で話す。あツ、その爺を逃すなツ」
形勢不穩と見て、其場から逃げ出さうとする六兵衛。早くもその後ろから平次の手が延びて、佛壇の前で雁字がらめにされて了ひました。
「八ツ、もう一人、あの手代を捉まへろ、重三とかいつた」
「よしツ」
八五郎は横つ飛びに飛び出しましたが、間もなく裏の方から、
「親分、大變。親分」
とわめき立てます。六兵衛を引つ立てて、飛んで行つて見ると、お雛を小脇に抱へた手代の重三、女のやうな優男に似氣なく八五郎を大地に叩き付けて、起き上がらうとするのへ匕首が――。
危機一髪のところへ、平次得意の投げ錢が飛びました。二の腕の關節を永樂錢に打たれて、思はず匕首を取落したところへ、飛込んだ平次。好い鹽梅に飛んで來てくれたお染の加勢で、この兇暴な手代をキリキリと縛り上げて了つたのです。

八

「親分、どうして、六兵衛と重三が惡者と解りました。少し繪解きをしておくんなさい」

二人の繩付を送り乍ら、夜の道を、八五郎はかう話しかけます。

「子供の怯えるのが、番頭の泊つた晩に限ると聞いて、これは番頭に疑ひをかけようとする者の仕業だなと氣が付いたんだよ」

「ヘエ――、こちとらとは物の考へやうがまるつきり違ふね」

「娘さんの飯に毒の入つてるのを、重三が見付けたと聞いて、いよ〳〵重三が臭いと思つた」

「益々わからねえ」

とガラツ八。

「さうぢやないか、お雛さんと坊ちやんを殺して儲かるのは、先代の弟の番頭友二郎だ。それに重三はあんな綺麗な許嫁を殺す筈はないから、番頭に疑ひをきせるには、坊ちやんばかりでなく、お雛さんにも何とかしなきアなるまい。毒を入れて見い出したのは皆んな重三の細工だ」

「成程」

「ところで、重三は、お雛さんと一緒になつたところで、精々小さい店を一つ持たされる位のことだが、坊ちやんを殺せば、お雛さんの聟で近江屋の跡取になれる」

「なあーる」

「で、親爺の六兵衛と共謀で、いろ〳〵細工をしたのさ」

「親爺」

「さうだよ、顏を御覽。六兵衛と重三は年こそ違へ瓜二つだらう。六兵衛は身持放埒で、若い時分は近江屋へ出入りも出來なかつた爲に、せめて伜だけは眞人間にしたいといふので、名乘りをしない約束で丁稚に頼みこんだんだ。その後六兵衛も轉げ込んだが、二人は、深い謀みがあるから表向は他人のやうに暮したんだよ」

「天眼通だね、親分」

「天眼通ぢやない。それだけは、番頭の友二郎さんから聞いたんだ」

「白鼠の仕掛けは？」

「あれは、餌をやつて居る白鼠は、夜になると腹ごなしに車を廻す、根氣の良い生物だ。それから思ひ付いて、車の心棒へ細い糸を手繰らせ、壁の上の穴から隣の佛間へ持つて行つて、佛壇の掛金を引かせたんだ。俺はすぐ開くやうにしたが糸を長くすると、半刻位かゝるから、六兵衛が仕掛をして自分の部屋へ歸つて、皆んな寢ついた頃佛壇が開くんだ。獨りで扉の開く仕掛けは、鯨の鬚が一本ありやいゝ。中から突つ張らせて置くだけの事さ。鯨の鬚は御丁寧にも大佛壇の中にブラ下げてあつたよ。誰にも氣が付かないのは不思議さ」

平次の明察は疑ひを挾む餘地もありません。

「で、親分。子供はどうして殺したんです」

「それには俺も首を捻つたが、生爪が痛んでるのを見て解つたよ。あれは、お前が飛出した後へそつと入つた六兵衛が、掻卷へ包んだまゝ、目を廻した子供を佛壇の下の抽斗の奥へ入れたんだ」

「えツ」

「抽斗はあの通り大きいから、奥へ突込んで、手前へ佛具のこはれを詰めると、少し開けた位ぢやわからない。それに氣が轉倒して居るから少し位抽斗が重くなつても氣がつかなかつたんだらう。――

二刻もたつて頃合を見て出した時は、すつかり冷たくなつて居たのさ。後で氣が付いて見たが、あの抽斗の奥には、可哀さうにひどく掻き瑕があつたよ」

「ヘエ――」

「憎い奴等だ」

「太い畜生だ、二つ三つ歐つてやりませうか」

先へ行つた繩付を追はうとする、ガラツ八を押へて、

「止せ〳〵、どうせお處刑になる身體だ。それより、俺は、お前に丁度いゝ嫁を見付けたよ」

「ヘエ――あのお雛さん？」

「馬鹿。お染の方だよ。當つて見ようか」

平次はカラカラと笑ひました。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物全集第十三巻　焔の舞」同光社磯部書房
　　1953（昭和28）年9月5日発行
初出：「オール讀物」文藝春秋社
　　1932（昭和7）年6月号
※題名「銭形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：門田裕志
2014年5月14日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

怪傳白い鼠

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　野村胡堂
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/